

文語日誌（平成二十六年十一月二十四日）

文語勉強の良き参考書の一つに本書（大正二年初版）あり。そは名著「作文講話及文範」（明治四十五年初版）の續篇といふべきものにて、前著同様、合資會社富山房發兌、芳賀矢一（文學博士、東京帝國大學教授）及び杉谷代水（富山房刊「國語讀本」の編集者）の共編なり。手許にあるは、大正九年刊行の縮刷改訂三十五版、當時の定價貳圓貳拾錢なり。

本書の構成をみるに、前篇「講話」（「手紙の上手下手」より「含蓄は書翰文の極致也」まで十三講、二七五頁）、中篇「便覽」（「季節行事一覽」より「行草便覽」まで八種の便覽、六拾壹頁）、後篇「文範」（「年始狀」より「雜信」まで二十三種類の手紙の類型別、六四三頁）より成る。

前篇中「實用專一の手紙」には、たとへば、羅馬の英雄ケーゼルの「來たり、見たり、勝ちたり」や本多作左衛門（徳川家譜代）の「一筆啓上、火の用心、おせん泣かすな、馬肥せ」を掲ぐ。

後篇の各所に配置せられたる内外名家の文範は、本書中にも特に拳拳服膺すべき名文の寶庫なれば、以下にその幾つかを紹介せむ。

○年始狀の例

旅順陥落の新年 乃木希典

『新年の御慶目出度申納候。然れば久々御無音に打過候處、實は彈丸と人命と時日の多數を消費しつつ埒明き申さず候爲、唯々苦悶慙愧の外之無く候。漸く須將軍も根氣負けの氣味にて開城致しくれ、當方面の一段落を得候。』

○祝賀文の例

人の出産を祝ふ 尾崎紅葉

『女子御出生の趣、大賀の義に存候。固より天の賜ふ所、何ぞ雌雄に因りて喜の大を爲すべき。母子共に健全ならば、即ち大慶たるべきに御座候。』

○音問の例

英國より 伊藤博文

『九月五日の御手がみ十一月三日に相とゞき、先々御障りなく御くらしの由芽出度ぞんじ候。又寫眞一枚慥に受取申候。私事も相替らず無事にくらし候間、御あん心下さるべく候。』

○依頼及び請願の例

幼兒を託す 豊臣秀吉

『秀頼事成立ち候様に、この書附候衆しん頼み申候。何事もこの外には思ひ残す事なく候。かしく。返すべく秀頼事たのみ申候。五人の衆頼み申候。名残をしく

候。』

○諭告の例

西郷隆盛に與へて降服を勸む 山縣有朋

『辱知生山縣有朋、頓首再拜、謹んで書を西郷隆盛君の幕下に啓す。有朋が君と相識るや、茲に年あり。君の心事を知るや、又蓋し深し。曩に、君の故山に歸養せしより、己に數年、其の間警咳に接するを得ざりしと雖も、舊朋の情は、豈一日も有朋が懷に往來せざらんや。圖らざりき、一旦滄桑の變に遭際し、反つて君と旗鼓の間に相見ゆるに至らんとは。』(明治大正文語五十撰にも採録)

(追記)

大正五年に、「書翰文講話及文範」の別篇として「現代名家書簡集」、富山房より刊行せらる。「手紙雜誌」主筆桑田春風氏半生に及ぶ丹誠苦心の蒐集にかかる材料より成る。

蘇峰、子規、紅葉、露伴らの名文を収録す。